

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2004年3月10日 第7号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内 (担当: 吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832
E-mail: yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々と連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

巻頭インタビュー

『日本の自然崇拝、西洋のアニミズム』著者 保坂幸博氏に聞く

「自然性」に立脚した対話への道

❖まず、本書の核心部についてお聞かせ下さい。

今日世界のほぼ全域で支配的なアカデミズムの一端として、宗教学もキリスト教ヘブライズムの思考システムの枠の中にあり、その中からの視線を世界中の宗教に向けています。我が国の宗教的なあり方も、そのような視線のベクトルに晒されているのです。本書は、日本人の宗教性を、ひとまずその視線の外において考えるべきだと主張し、西洋宗教学の「アニミズム」理論を退けました。しかし、そのような考察の方法は、当然のことながら、それではその言う「日本の宗教性」とは何かを提示せよとの要求を突きつけられるのです。個々の宗旨や宗派に限定されない広い枠組で、また、私達が生きている実感を奥の深いところで支えているもの、そのものをぼんやりとでも浮かび上がらせようという手探りの試みの結果、「自然崇拝」の言葉を選びました。

❖アニミズム理論との峻別もさることながら、そのぼんやりとしたものを自然崇拝と名づけることで、読者には何を示せたと思いますか？

アニミズム理論は、ヘブライズムの価値体系から原始的な宗教を見て言われた理論で、自然の山川草木の中に人間的なものを感じする、程度の低い信仰とされます。日本の自然崇拝はこの理論と異なるものだということは、少なくとも読者に示せたと考えます。日本の自然崇拝は、山伏の修験道などにいかにも宗教的なあり方で現れますが、自然の様々な存在を生活の拠り所とするごく普通の人々の生きる姿勢の中にもっとよく現れています。我が国の文化文芸がその証左です。また、この

姿勢は、いわゆる自然環境にのみ限定せず、人を取り巻く社会環境にも向けられます。自然と社会の環境が混然となって私達の世界を構成していると言ってもいいでしょう。そこで、人のあり方を決定するのは世界の転変極まりなさである、という思想が生まれたんです。

❖今日の我々はそれをどう体現しているのでしょうか？

私達はいわゆる「自然」以上に、「自然に」や「自然な」の言葉が多用します。最近、青みの魚はある物質を多く含むので健康に良い、といったテレビの番組が大いにうけます。しかしそれなら、そういう物質をギュッとつめ込んで1錠にしたサプリメントが大売れかという、そうではありません。私達はあくまで「自然な」健康保持を選びます。また、朝日新聞の連載、「サラリーマン用語辞典」に、「なりゆきでよろしく」という「自然に」物事が決してゆく言葉が紹介されていました。もっとも、今回のイラク派兵の「なりゆき」まかせは、重大過ぎるかもしれませんね。

❖政治文化にも色濃く現れているということですか？

そうなんです。特に国際政治で、良い面と悪い面の両極端の現れ方をしています。「自然性」の姿勢とは、自分の方の意思で原理原則を立てずに周囲の状況に対応する姿勢です。このため、先の大戦直後のような急激な変化にも、全面的に対応することが可能でした。戦後も、日米安保問題から最近の「特措法」まで、賛否両論ある中、結局原則無しの対応が行われました。明らかに悪い面としては、朝鮮半島問題やWTOの場で、また、究極は

保坂幸博氏
東海大学他教員
宗教学理論専攻



ヘブライズムが支配する「国際社会」の中で、私達の考え方を示すことができないことです。今こそ「自然性」に立脚した発言を、偏狭なナショナリズムに陥ることなく、皆で構築していくべき時ではないでしょうか。

❖国際社会の原理原則論とどう対話していくのか、これはこの本が読者に突きつけている問いですね。

まさにそうなんです。本書の根底には、世界のほとんどの民族、社会は、他ならぬ「自然の」感情や欲求の上に、生命と死の「自然的な」営みを土台として生育してきたのだという前提があります。そこで、共存のためには、その「自然的な」あり方を、悪い面も汚らしい面も含めて、「類比的共感的に」理解する道が良いというのが、本書のとりあえずの結論です。逆に言えば、「超自然」に立脚するヘブライズムは、全人類数万年の歴史において、異常な存在であるという含意があるわけです。

(インタビュー：新評論編集部、'04.2.20)

▼著者から読者への直筆メッセージ

西洋文明の思考システムから捉えらる日本人の宗教性とはどういうものかを、しっかり認識しよう。またあわせて、私たち自身の文明を、私たち自身の目で、深い基盤から幅広く考えてみたいものです。保坂幸博

『日本の自然崇拝、西洋のアニミズム——宗教と文明／非西洋的な宗教理解への誘い』保坂幸博 著
ヘブライズム・キリスト教文明圏の単一的な宗教観を対比軸に、日本人の宗教性を全世界的なパノラマの中に位置づけた、全く新しい宗教学理論の誕生。A5判上製、370頁、税込3150円

『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム』 ——宗教と文明／非西洋的な宗教理解への誘い—— を読む

2004年1月31日、第19回例会が著者保坂幸博氏を囲んで早稲田奉仕園キリスト教会館で行われた。氏の報告は、本書成立の由縁にまで及ぶものだった。氏の行き届いた闊達な語り口に触発されるかのように、本書のテーマと射程に関する多岐にわたる議論が4時間に渡って交わされた。参加者は桑田禮彰、土屋進、大野英士、出口雅敏、白石嘉治。以下、各人の発言要旨。(編集／白石)

○宗教学批判と日本人の自然崇拜

保坂 私はもともと哲学を専攻し、学生時代にはギリシア語を熱心に学びましたが、古代ギリシアの世界観は、ヨーロッパの学者にとって難題であると思っています。ところがヨーロッパの学者は、どうしてもキリスト教ヘブライズムというフィルターを通して古代ギリシアを思い描いてしまう。

たとえば、ソクラテスはたんなる哲学者ではありません。彼はある種の宗教的なカリスマです。とすれば、古代ギリシアの宗教性をぬきにして彼を理解することはできないでしょう。その点について私見を述べたのが、拙著『ソクラテスはなぜ裁かれたか』や『仮面をとったソクラテス』です。

また『新ガイジン論』では、古代ギリシア人と日本人の宗教性の類似についてふれてみました。言いすぎたところもあったかもしれませんが、キリスト教ヘブライズムがいわば鬼子であることはたしかです。自然崇拜、人間とは異なるものに対する崇拜は、日本や古代ギリシア以外にもひろく見出せます。それに対して、キリスト教ヘブライズムの人格神を中心とする人間崇拜は特殊なものです。

問題は、既存の宗教学が、キリスト教ヘブライズムに汚染されていることです。そうした宗教学では、自然と宗教は対極にあるものと考えられています。だから日本人に見られるような自然崇拜は、人格神を欠いているゆえに、宗教ではない、未熟なアニミズムと位置づけられてきたわけです。

とはいえ、宗教とは、世界に対面しつつ生きる拠り所です。人格神をもつ宗教だけが宗教ではないはず。むしろ今日では、キリスト教ヘブライズムに由来する人間中心主義が数多くの問題を引き起こしています。たとえば、環境問題。キリスト教ヘブライズムを雛型とする自然科学は、人間による自然の支配をめざします。それが限界に達している。あるいは、富の片寄りにしても同じです。なぜ、ビル・ゲイツのような一人格に富が集約されてしまうのでしょうか。

こうした現状において、日本人の自然崇拜には注目する価値があります。それは仏教的な世界観とも異なります。仏教は世界の因縁の洞察に立脚します。その点では自然科学が因果関係の観察に基づくのと同じです。一方、日本人の自然崇拜は、変化に対する受動性だけを仏教からうけつぎました。自然を支配する意志もなければ、仏教的な解脱への志向も稀薄で、変化し生成する環境に対する日常的な感受性を特徴としています。今度の『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム』では、人格神を暗黙に前提している宗教学への批判を通じて、日本人にみられる環境と親和的な宗教

性の今日的な可能性を、できるだけわかりやすく浮かび上がらせようと試みました。

○信の構造とロゴス批判

土屋 宗教の中心には、恐怖があります。結局のところ、キリスト教的な世界観においては、自然に対する恐怖が日本とはちがっていたのではない。異なった共同性、異なった信の構造も、そこから生まれるはず。

狭義の宗教のみならず、たとえばマルクス主義も、恐怖の源泉としての自然を支配するという意味では、キリスト教的な信の構造を備えていました。そうした支配の原理一般に対する批判として、日本の自然崇拜をとらえることはできます。

それはロゴス批判でもある。ロゴスとは、何らかの規範を課すものであり、共同性は規約によって作られる。それに対して、自然崇拜の信の構造は、かならずしも一者に収斂しない。共有される場としての自然に即した共同性も可能になります。ロゴスの支配への批判として自然崇拜を持ち出すことは有効です。ただし、オルタナティブな信の構造の対置が、不毛な二項対立に単純化される危険もあるのではない。

○没歴史的な理念型の陥穽

大野 パリ第七大学の授業で、ある科学史家



は、技術は世界中にあるが、科学は古代ギリシアと西洋だけにしかない。と私に告げました。また哲学者シジェールは、西洋には哲学があり、東洋には知恵しかない」と述べたあと、犬

キリスト教と民衆信仰

蔵持不三也(早稲田大学教員／歴史人類学)

アルザスのとある村教会を訪れた時のことである。何気なく目をやると外壁に無数の溝が刻まれている。いったい何か。考えあぐねて村人に尋ねると、農民たちが豊作予祝を願って鎌の刃をこすりつけた跡だという。また、一部の教会堂では、性行為そのものを描いたレリーフが今も外壁にみられる。もとより姦淫の戒めを説いたものだが、住民たちはそれを一種のポルノグラフィックな造形として愉しんでもきたはずだ。さらに、教会堂内の聖職者席にもしばしば愚者のレリーフがみられる。この造形には、おそらく痴愚性を断罪するメッセージが託されている。しかし、人々の目には、それはS.プラントが『愚者の船』で暗示したような、一種の諧謔的なカリカチュアとして映ったことだろう。

思うに、教会の意図は必ずしも民衆の解釈とは合致していなかった。人々はそうした意図の埒外ですら、何ら矛盾を覚えずに、自らの信仰を立ち上げていくことができた。民衆のイメージネールとはことほどさように自由奔放だった。教会側の提供するテキストを異化ないし脱テキスト化する。その手法を自家薬籠中のものとしていた。ここにはヨーロッパのキリスト教世界が内包するもう一つの信仰の形がある。

日本人の「自然」性とは？

大野英士(早稲田大学他、教員／文学)

豊臣秀吉がキリシタン禁圧の布令を出したのは、遠征に赴いた九州で、キリシタンの女に夜の伽の相手をするのを拒まれたからだという。信仰の教えを絶対として、自らの自由を守るため、死を覚悟で権力に抵抗する者がいたことは、民衆の出自ながら、権力への卑屈な屈従により成り上がった軍事独裁者の理解を越えていた。

「自由」も「人権」も「平等」も元を正せば、キリスト教の倒錯的な価値転換の中で生まれたと保坂氏は言う。

今、ネオ・リベラリズムの反動の中で、効率のためには人権も平等も犠牲にしてよしとする風潮が強まっている。だからといって、我々は「強い者には従え」という処世訓をも、日本に固有の「自然観」に基づくものとして甘受せざるをえないのか？ 和辻哲郎はキリシタン信仰渡来以前から広まっていた、人間の罪を我が身に背負って「苦しむ神」という表象が、日本社会におけるキリスト教の爆発的広まりの下地となったと指摘している。真の文明の意味は、外から一見新奇なものが現れた時、過去の記憶の集積の中に、それを理解し、自己の文化の一部として取り込めるだけの引証体系が備わっていることにある。福沢諭吉が「天は人の上には人を作らず」と言明した時、そこに平等の観念を読みとれない日本人はいなかったはずだ。我々の「近代」はそこから始まった。問題は起源ではないのだ。

にも知恵はあると付け加えていました。クリステヴァも、自由や人権を求める動きは世界中にあったが、それを概念化したのはキリスト教文明だと断言しています。

こうした言説に対する、我々の側の答えを用意する必要があります。とはいえ、彼らに対抗する言説が、没歴史的な理念型へと収斂することは避けたい。とりわけ、グローバル化のなかで、そうした文化主義的言説が反動思想に言質をあたえる可能性には十分配慮すべきでしょう。

○共感の技法の発明へ

出口 今日のグローバル化は、自分たちの文化を見直す契機となっています。ただ、文化の差異は、安易にメンタリティの差異に置き換えられません。日本の自然崇拝を語る場合にも、他者を排除するような土着主義に陥ることなく、共感の技法を発明していく必要があると思います。

事実、自然に対する接し方は、文化によって異なります。そして同じ文化の内部にも差異はある。文化とは、むしろそうした内なる社会的差異を可能にするものです。したがって、西洋／日本という文化主義的な対比ではなく、文化の複雑さを語ることが、共感の技法の発明へと繋がっていくのではないかと。

○別様な主体構築のために

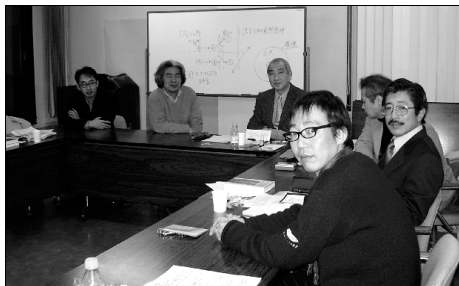
白石 金谷武洋の『日本語には主語はいらない』の主張を想起しました。ヨーロッパの言語では、主語が述語を支配します。それは人格神（＝主語）による自然（＝述語）の支配とパラレルです。ところが、かつて三上章も『象は鼻が長い』で説いたことですが、日本語には主語はなく、述語が主導的です。

それは日本人の自然崇拝と重なり合います。

本居宣長の言語観も述語的です。そこから主体のない排他的な共同体を正当化することも可能です。ただ、宣長が述語的な実情に基づく自律性を主張したように、自然崇拝の実感を等閑することなく、別様の主体を練り上げることもできるのではないのでしょうか。

○実感と批判的反省

桑田 本書は内容と文体が一体となっている稀有な例です。キリスト教へブライズムという鏡に日本人にとっての自然の実在性を映し出そうとしている。論の運びは平坦ではないが、日本人の自然性が文体に表れています。



著者を囲んでの座談会の模様

古代ギリシア哲学を宗教的な観点からとらえる立場は、プラトン哲学をギリシア神話の背景の上に浮かび上がらせた斎藤忍随を想起させます。また、フーコーが『性の歴史』第2巻で焦点をあてた、古代ギリシアにおける日常と思考の結びつきのことも考えました。

日常的な感情や実感とは、一般には軽視されています。でも、それは批判を提示するときのひとつの形です。保坂さんは「実感がない」という実感から考え直す。そうしてキリスト

教へブライズムを批判しつつ、日本人の自然崇拝を見出ししていく。ここには、実感の欠如において感情に耳を傾けるという、方法的に重要な批判的反省への道筋が示されています。

○宗教と生きる喜び

保坂 古代ギリシア語においても、やはり主語は支配的ではありません。また、たとえばホメロスでは、動詞はもっぱら中動態で用いられ、「泣かす、泣かされる」ではなく、「泣ける」というような表現が主流です。潜在的なものの生成が問題になっています。

私という自然崇拝とは、そうした生成にたいする感受性です。それは日本人の自然にたいする態度ないしベクトルであり、かならずしも自然そのものではありません。

その日本人の態度を強調するために、ときに二項対立的な図式を用いました。とはいえ、それはキリスト教へブライズムの特殊性を明確にする便法です。グローバル化という均質性への圧力のもとでは、ちがいを強調することも必要でしょう。それは自分の内的な信仰、あいまいではあるがその実在感をたよりに思考を紡ぐことでもあります。その意味での宗教とは、存在に対して漠然と向き合う態度であって、その出発点には、他者や環境とともに生きる喜びがあります。

座談会を終えて 保坂氏の夫人は、教員として著名なフランス人である。また金谷氏の夫人もフランス系カナダ人である。保坂氏と金谷氏が、日本の宗教と言語について同様の結論に達したのも偶然ではないだろう。いわばグローバル化した日常的な交渉のなかで、日本の固有性が見出されたはずである。それゆえ、応答への配慮に満ちた保坂氏の語る日本人の自然崇拝は、けっして排他的ではない。むしろ、一者に収斂することのない、複数性として存続する主体への方途を垣間見る思いがした。(白石)

宗教 と 信仰

桑田禮彰(駒澤大学教員／哲学)

宗教を「超自然的世界への往路」と規定するのは、正確ではないだろう。むしろ宗教とは、「超自然的世界見学パイパス」とでも言うべきものである。自然的世界の内ではぼっかり口を開けた超自然的世界への入口というよりも、ほうって置くと超自然的世界へさまよい出て彷徨したままこの世に帰還できなくなりそうな者のために設定された迂回路、超自然的世界を眺めながら確実に安全にこの世に戻って来れる迂回路である。逆説的であるが、自然的世界に対する信仰は超自然的世界に対する信仰と一体であり、前者が揺らぐから後者も揺らぐのではないかと。宗教はパイパスを通過させつつ、聖所・聖典・聖職者など多種多様な道具立てを駆使しながら、この揺らぎを消し去り一体となった二つの信仰を取り戻させるという社会的機能を持つのではないかと。そうであるなら信仰の究極的なかたちは、この世を絶対的に信じている「無信仰者」の信仰であり、そうした者は超自然的世界についても絶対的に信じているから、宗教は不要であろう。そして信仰は、必要とするパイパスが長くなるほど弱くなる。柏手ひとつ打つだけで瞬時に超自然的世界へ行って帰ってくる者こそ宗教的優等生であって、生涯を超自然的世界の探究に費やす者よりはるかに強い信仰を持つように思える。

現代の自然 と 自然崇拝

土屋進(中央大学他、教員／現代思想)

自然に対してどのような関係を切り結ぶのかを言語(ロゴス・神・共同主観)で表象する宗教は、自然と社会の中で生きていく人間が必然的に生み出す営為である。人間が直面する自然は多様であり、宗教も必然的に多様な姿をしていた。温和な風土に住む人々は、自然の恵みも悪もまるごと受け入れ、共感を育てていった。しかし厳しい自然風土に住む人々は、自然をまるごと受け入れることはできない。そこでは長い年月をかけ淘汰された知恵を具現する長老の経験が大きな役割を果たした。そして個人の力の及ばない圧倒的な力を前に、共同性が重要となり、自然の制圧をより強く意識していった。一方、変幻する自然との関わり方の外に生まれた宗教もある。出エジプトにより自然(循環する時間を保証された土地)から切り離された部族は、生存のための大地を共有意識(法)や変化の中の不変項(超越)に求めた。特殊な成立事情を持つこの世界観は、資本主義が土地の精霊から知恵を吹き込まれることのない多くのの人々を生み出すにつれ、社会に広まっていった。しかし私たちは、生成する自然という環境世界なしには生きていけない。さらに重要なのは、その自然も、人々が様々な移動手段を持つことによって、今その姿を大きく変えているという事実だ。

書 評 評

宮崎哲弥氏への返信

保坂幸博

【「朝日新聞」2003年5月18日付書評欄での本書評者、宮崎哲弥氏への返信】

宮崎哲弥氏の評論は著書の意図と構成の工夫を余すところなく読み取っており、極めて好意的な文末の印象批評とあわせて、著者として少々面映ゆい気持ちにすらさせられました。返信の言葉も見つからないほどです。しかし、その好意的な批評はおそらく、ことさら欠点をあげつらうわけにもいかない大新聞掲載の書評という性質から主として来るものであろうという、自戒めいた気持ちも沸いたのです。そう反省してみると、かえって、その好意的な批評の行間に、本書の抱える問題や危険が指摘されていると読み取りました。先日行われた「人文ネットワーク」第19回例会ではこうした点が忌憚ない言葉で指摘されたという印象でした。そこでその忌憚のない言葉を、宮崎氏の行間を利用しての暗示的な指摘に重ねあわせるというスタイルで、返信に代えます。

例会の席上白石嘉治氏が、本書の言う「自然崇拝」の外的流動性の概念に本居宣長との類似性を指摘されました。奇しくも、宮崎氏の指摘と軌を一にします。しかし、問題はそこから発展してくる危険です。つまりこれが日本文化の特異性を強調するあまり、文化的な地域主義に、悪くすると政治的な国粋主義にすら発展し、そのようなものとして利用されるのではないかということです。この点を、土屋進氏、出口雅敏氏も別の言葉で危惧していたという印象でした。本書が本居宣長に故意に触れなかった事情の一端を指摘されたのだと受け取っています。

次に、最近取り沙汰される西洋発の「文化本質主義」の背後に、異質なものに対する闘争排除の特性があるとすれば、それを醸成してきたのがキリスト教ヘブライズムであることは疑いがなく、大野英士氏の懸念は宮崎氏の書評の気分と合致します。本書の大きな特徴の一つが、キリスト教ヘブライズムの思考システムの中で、その視点からのみ一方的に他文明を見ることに對する抵抗であることに、間違いはありません。しかしまた同時に本書は、私達日本人の宗教性を幅広いコンテキストで捉えなおしたいということであり、桑田禮彰氏が「日本の自然崇拝の特殊な実在性」という表現を用いて、「本書からは、日本人としての自分の信仰のあいまいな実在感をあいまいなままに感じ取る」という趣旨のことを言われたのには、喜びを通りこして、驚嘆の念を感じた次第です。

(ほさか・たかひろ)

書店からの声

●阪急ブックファースト神田駅前店 永岡達郎

渋谷店勤務の時、「若者の街・渋谷」で、宗教を主題としたフェアを行った。果たしてその成果はいかかなものか。梵字や曼荼羅に限って言えば、関心は高い。あくまでもデザインやアイコンとして、ファッションブルだからである。それらをアートとして、あるいはファッションとして身にまとうことによって、彼らは個性を主張する。他人と違う自分。そこには、当然、信仰は存在していない。大切なのはカッコなのだ。宮崎哲弥氏の『日本の自然崇拝、西洋のアニミズム』への書評（「朝日新聞」）における、墓参りや仏壇という形式へのフェティシズムとは、異なっている。学研のエッセイカシリーズを除いて、フェア全体の売れ行きはさほど芳しくなかったが、この本は好調で、追加注文をした。その時分、アニミズムや憑依に対する関心が渋谷店の若いお客様の間で高まっていたように感じる。己は己でなく、他者もまた見かけ通りではないというような、幻想的な浮遊感覚が興味の糸口だったのだろうか。



【お薦めの8冊】●一神教VS多神教（岸田秀 新書館）●大鬼と小鬼（A.カー 講談社）●名譽と順応（池上英子 NTT出版）●ケガレの構造（波平恵美子 青土社）●日本の島（伊藤太陽 平凡社）●山水思想（松岡正剛 五月書房）●甦る神々（桑原知子 春秋社）●日本社会で生きるといこと（阿部隆也 朝日新聞社）

ブック・リスト

保坂氏が推す宗教理論入門書

*価格は全て税込

●仁戸田六三郎宗教哲学論集（仁戸田六三郎宗教哲学論集刊行会編 早稲田大学出版部 '83 5775円）8篇の論文からなる遺稿論文集。各論文はテーマが異なるが、どの論文にも西洋キリスト教文明圏の宗教のとらえ方に対し、日本独自の宗教性を深く追求しようとする姿勢を窺い知ることができる。キリスト教と日本人の宗教の表面的な比較を突き破る深い理解に通ずるものがある。

●聖なるもの（ルドルフ・オットー／山谷省吾訳 岩波文庫 '68 734円）世界の宗教を、目に見える現象から論ずるのではなく、その内面にある共通の宗教性から論じようとした著作。ヘブライズム・キリスト教の根底にあるものを感じ取らせる。年代はやや古い。今日の宗教現象学的手法をすてに余すところなく示している点でも優れた古典である。

●エクスタシーの人類学（J.M.ルイス／平沼孝之訳 法政大学出版局 '85 3045円）エクスタシーの状態に陥るシャーマン的な宗教者を、宗教社会学的な観点から世界的な規模でとらえた著作。シャーマン個人にのみ注目するのではなく、社会的コンテキストで考察したため、世界中のシャーマニズムにとって普遍的なものを探る優れた著作となっている。

●日本神道のすべて（瓜生中・渋谷伸博 日本文芸社 '70 1470円）日本の神話や、信仰の対象である神々、祭りと儀礼。さらには建築、美術等を体系的に述べた良著。あいまいなものであるとはしながらも神道とは何かの定義も試みている。また、神道の源流を縄文時代まで遡って考察する観点も、今後の我が国の考古学にも参考になると思われる。

●宗教学入門（ギュンター・ランツコフスキー／三小田敏雄他訳 東海大学出版会 '83 2310円）現代世界にとって宗教学がいかに重要な意味をもつかを解説し、併せて現在の世界における様々な宗教の現状を解説している。また、宗教研究に関わる諸学科の原理と、その研究範囲を明確にし、さらに、宗教学とキリスト教神学との間に、また宗教と哲学との間に生ずる問題を解説している。

状況雑感

第三の人類学

●出口雅敏（早稲田大学人総研究員／文化人類学）

「西洋の日本文化理解には誤解と偏見がある。だから、それを正すべきだ」。日本に限らず、非西洋の側からのこうした西洋の非西洋文化理解に対する批判は、いわば、西洋の学問的覇権に対する脱植民地化を標榜するものだ。

西洋が非西洋を理解するために誕生した学問、それが人類学であるからには、西洋発の人類学はこうした批判をその核心において受け止めざるをえない。近年では、非西洋発の「ネイティブの人類学」についての議論が、そのような批判への応答となっている。そこでは、普遍・透明と想定されてきた学問空間が、じつはヘゲモニックな政治空間であったと主張され、非西洋の声を西洋に届ける様々な方法が模索されている。米英仏中心の「人類学の世界システム」によって周辺化されてきた非西洋諸国の人類学が、西洋の学問的覇権に挑み、新たな学問空間を提案して対話の平等性を求めているのである。

しかし、自らのエスニシティ（ネイティヴィティ）を担保とするこうした非西洋の戦略、すなわち「ネイティブによる文化認識の真正性」に依拠する抵抗戦略には、一定の留保が必要である。そこでは、西洋の文化本質主義と同様、戦略の本質主義が内在している問題を解消することはできないからだ。一方、人類学の基本的プログラムが異文化理解という「非ネイティブの人類学」として構想されてきたことも忘れてはならない。他者理解、他者交渉の学がもつ歴史的可能性の未来を同時に探ることも大切なのだ。問題は、「ネイティブの人類学」と「非ネイティブの人類学」との間にどのような「第三の人類学」を成立させるかである。

編集後記▶読者が本の読み方において自由であるように、編集者にもまた、出版意図において自由がある▶「宗教と文明」と題された千枚を超える玉稿を保坂氏からお預りしたのは2002年11月、折しもブッシュがイラクを悪の枢軸と名指しし、早ければその年の暮れにも軍事攻撃を開始すると予測されていた時期である。ブッシュが使う「悪（evil）」の語は、宗教的な言葉で、神に敵対する悪魔を意味するらしい。日本は宗教に疎い、故にこうした発言にはさわるなという日本政府の構えは一貫していた▶同時期、反ネオリベのNGO有志による出版企画『平和・人権・NGO』（近刊）が成立。政府が唱える国益中心の官製平和構築論ではなく、文化・宗教の違いを知悉し、紛争地の人々に寄り添った真の人道支援活動が求められていた▶氏の「宗教と文明」論もこれらの文脈で読者に提供しようと思った。この作品を今日の国際社会と日本の状況に噛み合わせ、日本が宗教に対して決して第三者の位置には居ないことを明示するための企画。「類比的共感的宗教理解」を提唱する著者の意図とも共振させ、正タイトルは日本と西洋の輪郭をくっきりと対置する『日本の自然崇拝、西洋のアニミズム』と決定した。『日本の自然崇拝、西洋のアニミズム』編集者